

「はじめて学ぶ DRI」及び 課題発見・解決型モデル授業

小坂 有資 (大学教育基盤センター特命講師)

1. はじめに

本稿では、2019年度より開講されている「はじめて学ぶ DRI」と「課題発見・解決型モデル授業 1～3」の計4つの授業について報告する。これら4つの授業は、全学共通科目の課題発見・課題解決能力の育成を目的とした主題 B「現代社会の諸課題」の授業であり、また、2018年度の創造工学部新設を契機に始まった DRI 教育の一翼を担う授業でもある。

そもそも、DRI とは何か。DRI とは、Design thinking (デザイン思考)、Risk management (リスクマネジメント)、Informatics (インフォマティクス) の頭文字であり、DRI 教育を通して地域社会に新たな価値を創造することができる人材の育成を目指している¹⁾。このような DRI 教育は、全学共通教育においても実施されている。全学共通教育では、課題発見・課題解決能力の育成を目的とした主題 B の実質化を行うことによって、DRI 能力の特にデザイン思考能力を育成するための基盤的教育の機会を担保してきた²⁾。さらに2020年度から、より高度な DRI 教育を学びたいという学生のニーズにこたえるために、DRI イノベーター養成プログラムが本格実施される³⁾。

この DRI イノベーター養成プログラムには、デザイン思考能力を育成する D コース、リスクマネジメント能力を育成する R コース、数理・情報基礎力を育成する I コースがある。「はじめて学ぶ DRI」は、これら3つのコースすべての必修科目である。また、「課題発見・解決型モデル授業 1～3」は、D コースの選択科目になっている。

「はじめて学ぶ DRI」と「課題発見・解決型モデル授業 1～3」には、次のような関係性がある。第1クォーターで「はじめて学ぶ DRI」を受講した学生が、継続してデザイン思考に関連する学びができるように、第2クォーターでは「課題発見・解決型モデル授業 1」、第3クォーターでは「課題発見・解決型モデル授業 2」、そして第4クォーターでは「課題発見・解決型モデル授業 3」を開講している(具体的な授業内容については後述)。

ここまでは、「はじめて学ぶ DRI」と「課題発見・解決型モデル授業 1～3」の4つの授業の共通点と関係性について、簡単に述べてきた。以下では、各授業の具体的な内容について紹介していく。

2. 「はじめて学ぶ DRI」

「はじめて学ぶ DRI」は、主題 B の1科目(1単位)であり、1年生から受講可能な授業

である（主題 B 授業タイプ A：課題発見＋解決型（学生主導）⁴⁾）。この授業では、全 8 回という短い期間で、受講生に DRI とそれらの活用方法を伝えなければならないため、授業の目的を次のように設定した。それは、「DRI を地域活性化にどのようにいかせるか、考え、説明することができるようになること」である⁵⁾。

2019 年度の第 1 クォーターに実施した「はじめて学ぶ DRI」の授業には、約 70 人の学生が参加し、人数にばらつきがあるもののすべての学部から学生が参加していた。地域課題の発見と解決を行ったグループワークでは、6 人あるいは 5 人で 1 つのグループをつくり、12 班に分けた。なお、グループは、学部や学年等ができる限りまとまらないようにした。

ここからは、授業がどのように進められたかをみていこう。第 1 週、第 2 週では、グループで取り組む地域課題として、日本政府の地方創生政策「まち・ひと・しごと創生総合戦略 2018 改訂版」⁶⁾ の 4 つの基本目標（「地方にしごとをつくり、安心して働けるようにする」、「地方への新しいひとの流れをつくる」、「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」、「時代に合った地域をつくり、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する」）から 1 つを選択し、さらにそこから各グループでより具体的な地域課題を発見し、その解決策を考えた。第 3 週～第 5 週では、D・R・I の専門家が、D・R・I を地域活性化にどのようにいかせるかを説明した。第 6 週、第 7 週では、グループで最初に考えた地域課題の解決策を DRI の観点から捉え直し、新たな解決策を考え、それらを発表した。なお、グループで取り組んだ地域課題は、次のとおりである⁷⁾。

若者のやりたい仕事がない／待機児童／地域医療の問題点／高齢化による農業の衰退
 ／人口減少によって衰退する伝統工芸品・伝統芸能／国の支援を受けられない準過疎
 地域の活性／離島の人口減少／ダム地域の環境整備・自然保全・地域活性化・アーティ
 スト育成／香川県のインバウンドへの対応／香川県の観光客を増加させよう／地方の
 観光地の活性化

このように「はじめて学ぶ DRI」は、①グループで地域課題を発見し、その解決策を考え、
 ② D・R・I それぞれの専門家が D・R・I を地域活性化にどのようにいかせるかを説明し、
 ③グループで最初に考えた地域課題の解決策を DRI の観点から捉え直し、新たな解決策を
 考える、という流れになっている。それではこの授業を受けた学生は、どのような感想を
 抱いたのだろうか。以下に、学生の感想をいくつか挙げておく。

- ・ DRI について学ぶ前と学んだ後ではプランが大きく違っていて、自分の成長を感じることができました。（教育学部 1 年生）
- ・ DRI はこれからの地域社会の問題を解決するのに必要不可欠だと感じました。これから自分がそれらの問題を解決するにあたり、DRI を使っていきたいです。（法学部 2 年生）
- ・ これからの人生で DRI の観点から物事を見ることができるようになったと思います。

また、これからの時代、DRI の観点から考えるのは、とても重要なことであると実感しました。(医学部 1 年生)

この授業での学生の発表やレポートをみたうえで、以下のような課題が出てきた。今回学生は D・R・I それぞれを理解することはできていたが、D・R・I を地域活性化に活かすためのより具体的な方法を考えられていなかった。その原因の一つとして、地域課題の設定の仕方が挙げられる。今回の授業で地域課題を設定する際、多くのグループが現状分析に注力し、地域課題の原因となる歴史的な背景や構造、そしてより具体的な事例まで十分考察できていなかった。たしかに、短期間でこれらすべてを考察したうえで地域課題を設定することは難しいかもしれないが、これらの要素を意識したうえで地域課題を設定することはできるだろう。そのため来年度からは、これらの点を意識したうえで、毎回の授業設計を行いたいと考えている。

3. 「課題発見・解決型モデル授業」

3-1. 「課題発見・解決型モデル授業 1～3」

ここからは「課題発見・解決型モデル授業 1～3」の授業紹介に移りたいが、その前に、「課題発見・解決型モデル授業」について説明する。「課題発見・解決型モデル授業」は、学生にとっては課題発見・解決について学ぶモデル授業であり、教員にとってはそれらを教えるためのモデル授業となる。

上述したように、「課題発見・解決型モデル授業 1～3」は DRI イノベーター養成プログラムのデザイン思考能力を育成する D コースの科目 (D 科目) であり、これら 3 つの授業を通してデザイン思考を学ぶことができるように授業設計されている。

本学ではデザイン思考として、共感 (Empathize)、問題定義 (Define)、創造 (Ideate)、プロトタイプ (Prototype)、テスト (Test)、というスタンフォード大学デザインスクール流のデザイン思考の 5 つのステップを活用している(「DRI 能力育成科目の考え方について」に関する Q & A)。これら 5 つのステップについて、「課題発見・解決型モデル授業 1」では共感を、「課題発見・解決型モデル授業 2」では共感と問題定義を、そして「課題発見・解決型モデル授業 3」では創造とプロトタイプとテストを扱う。なお、学生は、「課題発見・解決型モデル授業 1」で共感あるいはそのための構えについて学び、「課題発見・解決型モデル授業 2」では課題発見をし、それらの発見した課題を「課題発見・解決型モデル授業 3」では違った視点から分析し解決するという授業設計になっている。

本論ではここまで、「課題発見・解決型モデル授業 1～3」という名称を使ってきたが、2019 年度に開講しているこれらの授業は、「差別とマイノリティ」(主題 B 授業タイプ C: 課題発見型 (学生主導))、「マイノリティのライフストーリー」(主題 B 授業タイプ C: 課題発見型 (学生主導))、そして「社会デザインとマイノリティ問題」(主題 B 授業タイプ A: 課題発見 + 解決型 (学生主導)) という授業科目名で開講されている。授業科目名から分か

るように、これらの授業ではマイノリティがキーワードになっている。なぜ、マイノリティがキーワードなのか。

本学におけるデザイン思考では、他者に対する共感が基盤となっている。しかし、マイノリティは共感されにくく、時には差別や排除の対象になることもある。そこで、より共感することが難しいと考えられているマイノリティの存在を知り、彼女ら彼らの声を聴くことで、デザイン思考における共感の技法が身につくと考えている。さらに、マイノリティの視点に立つことで、自分のマイノリティ性にも気づききっかけになるかもしれない。自分のマイノリティ性に気づくということは、主題 B の到達基準「21 世紀社会の現状を理解し、その課題と解決策を自己と関連付けて探求することができる」にも関わることである。

以下では、第 2 クォーターで実施した「差別とマイノリティ」について報告する。なお本稿執筆時点で、「マイノリティのライフヒストリー」は開講中であり、「社会デザインとマイノリティ問題」はまだ開講されていないため、本稿では言及できない。そのため、これら 2 つの具体的な授業報告については、別稿にゆずることとする。

3-2. 「差別とマイノリティ」

「差別とマイノリティ」は、主題 B の 1 科目（1 単位）であり、1 年生から受講可能な授業である。この授業の目的は、「自分の中にある決めつけや思い込みから距離をとる態度を身につけることによって、マイノリティの人々が抱えている問題を自分自身と関連づけて考察することができるようになること」である。

2019 年の第 2 クォーターで実施した「差別とマイノリティ」の授業には、約 70 人が参加した。この授業では、LTD 話し合い学習法（Learning Through Discussion）という小グループによる話し合いを中心に学習を進める技法を使った。LTD 話し合い学習法は、課題文⁸⁾の予習と、予習をもとにした授業でのグループワークによって構成されている（安永悟・須藤文、2014、3-57 頁）。課題文の予習は、筆者の主張を理解するという共感の技法を学ぶ手段にもなる。また、予習をもとにした授業でのグループワークは、他の受講生の主張を理解するという共感の技法を学ぶ手段にもなる。グループワークでは、毎回グループを変更した。これは、自分以外の様々な受講生の主張を理解するための仕組みであった。

表 1. 「差別とマイノリティ」シラバス

ナンバリングコード B2THB-cxxG-10-Lg1 授業科目名 (時間割コード:000421) 差別とマイノリティ Discrimination and Minority	科目区分 主題科目	時間割 2Q火1	対象年次及び学科 1～全学共通科目
	水準・分野 B2THB	DP・提供部局 cxxG	対象学生・特定プログラムとの対応 10
	授業形態 Lg	単位数 1	
担当教員名 小坂 有資, 西本 佳代	関連授業科目	瀬戸内国際芸術祭とマイノリティ問題	
	履修推奨科目	マイノリティのライフストーリー、社会デザインとマイノリティ問題	
学習時間 授業90分×7回+授業45分×1回+自学自習			
授業の概要 【キーワード】共感、差別、日常、マイノリティ デザイン思考とは、デザイナーの営みをモデルにした課題を発見・解決するための技法です。この授業では、デザイン思考のプロセスの中で重要な位置を占める「共感」に焦点をあてます。具体的には、「日常の中に潜む差別」に着目し、共感という技法を用いてマイノリティの人びとが抱える問題を明らかにします。			
授業の目的 マイノリティへの差別問題は、自分自身と関係のないものだと考えられているかもしれませんが。この授業では、日常から距離をとる態度、自分の中にある決めつけや思い込みから距離をとる態度を身につけることによって、マイノリティの人びとが抱えている問題を自分自身と関連づけて考察することを目的とします(共通教育スタンダード「21世紀社会の諸課題に対する探求能力」に対応)。このことは、デザイン思考との関係でいうと、共感の技法を身につけることと同様です。			
到達目標			学習・教育到達目標 (工学部JABEE基準)
1. 普段意識しないような日常生活の中にある差別を発見し、説明することができる。 2. 自分自身と関連づけて日常生活の中にある差別の問題点を論じることができる。 3. 本授業のアプローチを、デザイン思考の共感の技法に関連づけることができる。			
成績評価の方法と基準 コメントシート40% (到達目標の1に対応)、レポート60% (到達目標の2と3に対応)			
授業計画並びに授業及び学習の方法			
【授業計画】 第1週 ガイダンス：デザイン思考と差別問題 第2週 差別の日常 第3週 差別について 第4週 差別者と被差別者の対話 第5週 差別を学ぶ 第6週 からかいに対抗する 第7週 「決めつけ」「思い込み」を崩す 第8週 振り返りとまとめ			
【授業及び学習の方法】 授業は、講義とグループワークによって構成されています。各週の授業は、主に次のような方法で行われます。講義は、第1週と第8週です。グループワークは、第2週～第7週です。第2週～第7週の授業では、LTD話し合い学習法(Learning Through Discussion)という小グループによる話し合いを中心に学習を進める技法を用います。LTD話し合い学習法の具体的な方法については、第1週のガイダンスで説明します。コメントシートは、毎週提出です。			
【自学自習のためのアドバイス】 第2週～第7週は、教科書の指定箇所を事前に読んできてください。教科書の指定箇所や予習の仕方については、第1週のガイダンスで説明します。			
教科書・参考書等 ・教科書：好井裕明 (2007)『差別原論：〈わたし〉のなかの権力とつきあう』平凡社、760円(税別) ・参考書等：授業中に適宜紹介します。			
オフィスアワー			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ ・教科書の購入は必須です。第2週の授業時に持参してください。 ・授業はグループワークが中心なので、やむを得ない場合を除いて遅刻・欠席をしないようにしてください。			

以下は、「差別とマイノリティ」を受講した学生の感想である。

- ・予習で自己と差別現象を関連づける場所があったので、自分を見直すきっかけになって良かったです。また、LTD 話し合い学習法のおかげで、グループで意見を交わし、新しい気づきを得たり、考えを深めたりすることができました。(創造工学部1年生)
- ・自分の意見を発信すると同時に相手の意見も入ってくるため、差別に関する理解がより深まりました。自分とは異なる視点からの意見が多く聞けて面白かったです。(医学部1年生)
- ・回数を重ねるごとに慣れてきて、人の意見を聞くことが面白くなってきました。また、今まで他人事として捉えていた差別の問題が、身近に感じることができました。(教育学部1年生)

「差別とマイノリティ」の授業を行い、以下のような課題が出てきた。上述のように LTD 話し合い学習法は、予習が必須である学習法であり、その学習法とその意味を伝えたいので、グループワークを行った。しかし、最初のうちは予習ができていない学生が5～10人おり、授業中に予習をする学生がいた。そのため、予習をしていない学生には別の課題を課した。授業に出席しなかつ予習をしていないという学生は徐々に減少し、最後にはほとんどの学生が予習をしてくるようになった。また、次年度からは、事前に Moodle を使って予習シートを提出させるという方法をとる予定だ。そうすることで、予習をしている学生と、そうでない学生を分けることができ、予習をしている学生が不利になることを避けられるだろう。

4. おわりに

本稿では、2019年度より開講されている主題Bの4つの授業、すなわち「はじめて学ぶDRI」、「課題発見・解決型モデル授業1～3」の報告を行った。「はじめて学ぶDRI」と「課題発見・解決型モデル授業1～3」の関係性や、それらの授業設計については説明することができた。しかし、具体的な授業報告については、投稿締切日の関係上、上記の2つの授業についてしか行うことができなかった。今後は、上記4つの授業を受講している学生のデータや、4つすべての授業を受講した学生がいた場合、その学生にとってどのような学びがあったか等をインタビューし、4つの授業を受講した学生の特性と、4つの授業設計に関する課題を考察し、次年度の授業につなげていきたい。

注

- 1) DRIの説明については、香川大学大学教育基盤センターのウェブサイト「DRI教育とは」というページをもとに作成した。なお、以下の、学生向け情報と教職員向け

情報の両者を閲覧した。学生向けのページ：<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/students/dri/about/> < 2020年1月23日アクセス>、教職員向けページ：<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/teachers/dri/about/> < 2020年1月23日アクセス>

- 2) 全学共通教育における主題 B の実質化とデザイン思考教育の詳細については、三宅 (2020、5-13 頁) を参照すること。
- 3) DRI イノベーター養成プログラムの詳細については、西本 (2020) を参照すること。
- 4) 2019 年度のシラバス提出時に、主題 B の授業担当者を対象に、授業タイプについて聞くアンケートが実施された。そこでは、タイプ A：課題発見＋解決型 (学生主導・課題発見＋課題解決のワークを行う授業)、タイプ B：課題解決型 (学生主導・課題解決策を提示するワークを行う授業)、タイプ C：課題発見型 (学生主導・課題発見のワークを行う授業)、タイプ D：課題理解型 (教員主導・課題について理解を深める授業)、タイプ E (課題発見・解決の前提となる知識の獲得を目的とする授業)、という選択肢が設けられていた。
- 5) 「はじめて学ぶ DRI」のシラバス等については西本 (2019) を参照すること。
- 6) この資料については、以下のページよりダウンロードすることができる。<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/#an15> < 2019年11月18日アクセス>
- 7) 待機児童を扱ったグループが 2 グループあったため、以下では 11 の地域課題を記載した。
- 8) 授業で扱った課題文は、好井 (2007) である。

参考文献

- 安藤悟・須藤文 (2014) 『LTD 話し合い学習法』ナカニシヤ出版。
- 三宅岳史 (2020) 「全学共通教育におけるデザイン思考」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 17 号、5-13 頁。
- 西本佳代 (2019) 「DRI イノベーター養成プログラムについて」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 16 号、55-63 頁。
- 西本佳代 (2020) 「DRI イノベーター養成プログラム始動」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第 17 号、27-34 頁。
- 好井裕明 (2007) 『差別原論—〈わたし〉のなかの権力とつきあう』平凡社。